アメリカの業者も驚いた

―徹底した合理化―

大阪・山根ヤード拝見

国道二十六号線を南へ……大和川をこえるとすぐ右側に堺臨海工業地帯が大阪港の中へひろがっている。二、三分も走れば海山通と交叉する。ここで右へハンドルを切れば八幡製鉄につきあたるのだが、下車すればすぐ左側に、日商指定「山根ヤード」の長い二列の建屋がそびえている。各種のスクラップを満載したトラックが、つぎつぎとこの建屋の中に吸い込まれている。

一方の建屋の入口に、コンクリートのさいころ型二階建が「こぶ」のようにくっついているが、これが事務所である。同じようによごれた作業服を着ているので、ちょっと見分けがつかないが、うがい瓶と香港フラワーがのっている机の主が社長である。トラック・スケールももちろんこの建物のなかに無駄なくおさまっている。

機械化された加工工場

一般の先入観によれば、鉄くずヤードといえば、露天の鉄くず置き場であり、その一角に木造の事務所とトラック・スケール、せいぜいそれに屋根で保護されたプレス機とシャー機を思いうかべる。

けれども、山根商店の鉄くずヤードはひとつの工場である。鉄くずが出入りしていなければ、これを鉄くずヤードと気づく人は誰れもあるまい。さき頃、アメリカの鉄くず業者がこのヤードを見に来たが、「規模はあまり大きくはないが、合理化の点では、アメリカにもこれはどのヤードはない」と、いくらかのおあいそがあるにしても、「ワンダフル」を連発したそうである。これは案内をした商社マンの話である。

総建坪一、五〇〇坪の建屋の中に足をふみ入れると、まず最初にインドのガニー・バック入り銑ダライ粉が積みあげられている。商社を通じて輸入したものである。天井走行クレーン（五㌧）で操縦される神鋼電機製のマグネットが忙がしく動いて、弾丸プレス機に前記の銑ダライ粉を食わしている。マグネットは銑ダライ粉を布きれをひっぱるように吸いつけては運び、放っている。三〇馬力の弾丸プレス二基が組み合わせてあり、マグネットが食わす銑ダライ粉を、ひっきりなく弾丸形にプレスして、コンベアーの上に投げ出している。これはいうまでもなく製銑原料である。

次の作業場には普通の三〇馬力プレス機が動いている。ここでは、電気炉が歓迎するピーナッツ・バンドル（小型プレス）をつくっている。が、ホイスト（三㌧）を使って、材料の装入と製品のとり出しを行なっている。製品はホイストによってそのままトラックに積み込まれて、メーカーの炉前へ運ばれている。製品の集積や積もちの重複を避けるために注意深い管理が行なわれている。

次の作業場も三〇馬力プレス材が中心となっているが、ここでは鋼ダライ粉をプレスしている。同じように三㌧ホイストを使って製品をとり出している。

ここで、第一列の工場は道路に面した裏口へ抜ける。トラックがひんぱんに出入りしている。

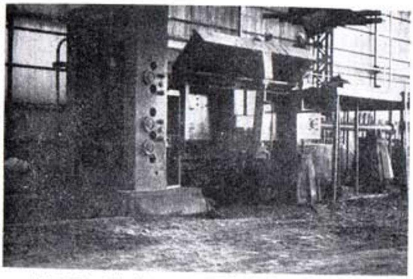
いったん裏口から道路へ出て、第二列の工場へ裏口から入ると、シャーリング機三基がならんで可鍛コロを切っている。これに食わせる切断材料は、天井走行クレーンの神鋼電機製マグネットで運ばれて来る。二〜三〇㌢に切りきざまれた可鍛コロがみるまにたまってくるが、同じマグネットがこれを運び去る。

ギロチン・シャーの偉力

次の作業場はリンデマン西独製油圧式シャー機が中心である。型式名はLUPRE FH 350㌧、八六馬力。さきの試運転では、最も固い材質のスクラップを一時間に一三・八㌧切断して見る者を驚かせた。操縦者一人がハンドルで動かしている。

筆者が見学したときは、ちょうど自動車のボデーを切断中であった。天井走行クレーンのマグネットが、運んできたトラックから直接材料をとって、シャー機のベッドに投下している。その間も刃は休むことなくざっくざっくと切って行く。

仮りに、自動車のボデーをプレスすれば、所謂「Aプレス」級だが、同じ材料を平炉サイズに切断すれば「一級」なみになって、トン当り五百円見当の高値が通る。すなわち、機械化によって加工コストを安くするだけがねらいでなく、加工の新分野をひらいて鉄くずの値うちそのものを高める、という一石二鳥がねらわれている。



リンデマン　シャー機：マグネット（右上）が切断材を運んでいる

儲かっているか、どうか

これでヤードを一巡したわけだが、作業人員は約五〇人、毎日約二〇〇㌧の鉄くずを加工している。このほかに、トラック一一台、バタバタ（小型三輪）六台が外に放たれている。毎日いくらかせいでいるだろうか？それは社長のみが知るところである。これだけのヤードにいくら資本が投下されているだろうか？それも社長のみが知るところである。

一、五〇〇坪の土地とその建屋、機械設備、それはいちどに出来たものではなく、消却済みの設備も多いであろう。だが、いま土地を買ってこれだけの工場をつくるとすれば、おそらく三億円はかかるのではあるまいか。その金利と消却費、諸経費を考えて、果して有利な企業であるかどうか、その判定をにわかにくだすわけにはいくまい。

鉄くず加工の機械化には、外目にはわからない悩みも多いようだ。それを山根社長にきいてみよう。

「鉄くずはメーカーさんにとってお米のようなものだといわれています。そこで私は、そのお米を、そのまますぐ釜に入れて炊けるような白米に精製してさし上げようと考えたのです。そうすれば、メーカーさんも白米の価値を認めてくれて、精白賃だけは余分にくれるだろうと思ったのです。そこで、私の精米所も企業として成りたつだろうと考えて始めたのがこのヤードです」

理解をしめさぬメーカー

「しかし、やってみると、はじめ考えていたように甘いものではありませんね。メーカーさんによっては、値をたたきさえすればよいと思っているのか、〝おれのところは、そんなに手をいれたスクラップでなくてもよいのだ。手を入れるのはお前の勝手だから、余分の値を出すわけにはいかない〟というのです。アタマにきますね。おれとこは玄米でよいのだ、白米にして来たのはお前の勝手だから玄米の値しか払わない、というんですからね」

「どんな加工をするにせよ、鉄くずは手を加えるほど歩留もおちるし、目減りしますが、メーカーさんは、知ってか知らずか、この事実を認めようとはしません。また、検収係の人は見かけだけを気にしているようで、実際に使用するに当ってのメリットから鉄くずを見る立場にたっていないような感じをうけます。このように、製鋼家であるメーカーさんが、鉄くず加工について正しい認識を持っていない、或は持っていても購買方針に反映しない、ということは、今後の鉄くず加工をやる者にとっては、非常に大きなブレーキになる、と思います」

それでも私は行く

「どうかすると、私の行き方は間違いじゃなかったか、という懐疑におそわれることもあります。鉄くず業というものは、やはり従来のように、儲かるときにはメーカーさんの弱みにつけ込んでとことんまで儲け、わるいときには商売を縮らしてじっとしている……そのようなやり方がよいのではないか、と。だが、いまさら後にひくわけにはいきません。私のやり方がすこし早すぎたかもしれないが、私が考えたような鉄くず時代が、遅かれ早かれ、やってくるように思うのです」